前口上

以前、この年報で「教養×教育」という特集を組んだことがあります。第4号でしたから、一昨年（平成30年→2018年）のことになります。その時も、ほとんど今回と同じような、似たような事態が起きました。一つには、ごく普通に「教養教育」という名を宛がえば済むはずの所を、強いて「×」を中に差し挟んだ、おかしなタイトルに改めたことです。この間の事情につきましては、その折の「前口上」に記しておきましたので、もはや繰り返しませんが、要は「教養教育」という形で、いたって当たり前に大学では使われております、この不思議な……と申し上げるしかない、不可解な語に対して、あえて私たちは今、違和感を持つべきではあるまいか、そして、その違和感を発条（ばね＝弾機）にして、もう一度、この語の意味や成り立ちや、小難しく言えば、例えば英語では reason for being だとか、あるいはフランス語では raison d'être だとか、はたまたドイツ語では Realgrund だとか、このように呼ばれております「存在理由」を、もう一度、私たちは現時点で振り返り、問い掛けるべきではなかろうか、という問い掛けが、この際の編集の意図にはありました。なにしろ、このようにして「教養教育」と称されているものを、上記のごとく、知ったかぶりの、うろ覚えの外国語でスノッブ（snob＝靴屋）風に表現しようと致しましただけでも、たちまち私たちは立ち竦み、途方に暮れざるをえないのですから、これは困った話です。

二つには、このようにして「教養×教育」という名を冠しました途端に、いつもなら気軽に、ひょいひょいと執筆に応じて下さる皆さんの筆が俄にストップし、とうとう今回と同様、ぎりぎりの刊行に漕ぎ着ける仕儀に至りましたことです。ちなみに、今回もタイトルには「地域＊教養」という形で、これがアステリスク（asterisk＝星印）のことなのか、それとも、これを90度回転させた「スターマーク」のことなのか、はっきりとは決め兼ねる、いい加減な態度を取り続けておりました訳ですが、その理由は他でもありません。これを仮に前者と見なせば、そこには掛け算や乗数の意味が生じ、そのまま「×」と同じ使い方になりうる面がありますと共に、これを仮に後者と見なせば、そこには私たちの身近な電話機や、その電話機（telephone）にも似て、実は遠い空から私たちの許に届く、はるかな音や声を聞き、読み取るための、あの占星術（astrology）が姿を見せることにもなるでしょう。そのような……はなはだ曖昧な、かそけき、と古代の「やまとことば」が表現を致しましたような、微妙な関係をも表現するために、今回のタイトルは選ばれています。ただし、これが単純に「×」と「－」とを重ね合わせた姿や、例えば言語学で使われている、錯誤や非在の記号へと、いとも容易に転じうることも疑いがなく、そのような心配や不安が現在の大学には充ち満ちておりますことも、あえて今回、言外に含ませたかった次第です。